

特集

子どもと祭り

地域でのお祭り体験

～娘たちとの夏を振り返って～

小泉かおる

夏休みの楽しみ

小学校が夏休みに入った後、

「駅に向こうは八月十七日と十八日で、K公園は二十二日と二十三日で……」

といった具合に地域のお祭りの開催日を確認し、仲

良しの友達を誘い、浴衣や帯や髪飾りをどうするか

あれこれ考えるのが、娘たちの夏の楽しみの一つで

した。

親の私かというと、それに付随する煩わしさを思

い、正直、憂うつさを感じないこともなかったの

ですが（浴衣の準備や洗濯はもちろんのこと、彼女た

ちが友達と約束した後、相手の親御さんとの送り迎

えの確認や当日の送り迎えなど、母がすることは多

岐に渡っていました）、今では、十八歳と十六歳と

なった娘たちが携帯電話で友達と約束を取り、自分

たちで浴衣を着るようになり、母を全く必要としな

くなると思議なもので、あの独特の高揚感と、そ

れを包み込むような真夏の夜の優しさが懐かしく思
い出されます。

巡りくる非日常

当時の母親の複雑な心境も知らず、彼女たちが
喜々として通っていたのは、マンションの駐車場の片
隅で開催される住民手づくりのお祭りや、地元の商
工会が近所の公園で主催する小規模のお祭りでした。

浴衣を着せてもらい、子ども会から配布された引
き換え券を差し出して、お菓子をもらい、ゲームに
興じ、あるいはキャラクターのついたビニール製の
財布に数百円の小銭を入れて、屋台のかき氷やラム
ネを買い、会場の片隅で友達と過ごすひとときがど
れほどに彼女たちの小さな心を躍らせたのか。七月
末の幼稚園での夏祭りを皮切りに、四か所で開催さ
れる地域のお祭りにほとんど連日参加していた時期
もありました。

彼女たちのグループを少し離れて見ていると、各
自買った飲み物やアイスを持って歩き回り、立って
おしゃべりしているだけで、笑みがこぼれ、頬が緩
みっ放しのようでした。

この時しか着る機会のない浴衣に身を包む暗れが
ましき、夕方から夜にかけての時間帯、焼きそば、
かき氷などおなじみの屋台が並び、おはやしが流
れ、人が独特のにぎわいを見せる空間、そして仲
間。近所の顔見知りの大人たち。思いがけず出会う
学校の男子たち。

彼女たちにとっての地域のお祭りとは、毎年かな
らず巡ってくる非日常だったのですね。

マンションの夏祭り

そもそも、マンションのお祭りに初めて行ったの
は、長女が六か月を過ぎたころでした。入居したば
かりで、右も左もわからなかったころでしたが、お

祭りの最後、恒例のビンゴ大会に四十〜五十人ほどの老若男女が集まり、番号が読み上げられるたびに一斉に上がる歓声や失望の声や、一喜一憂している姿が印象的でした（当然次の年から私たちもその中の一員となったのですが）。

次女一歳・長女三歳のころ

下の写真は次女が生まれた翌年に撮ったものです。駐車場の片側にゴザが敷かれ、反対側にはテントが二つ立てられ、飲み物や食べ物が配られています。奥は子ども会のゲーム会場となっており、ヨー釣りやスイカ割りなどが行われています。祖母が見立ててくれた浴衣を二人に着せて出かけると、近所の人に、

「あら〜、かわいいわ〜」

「大きくなったわね〜」

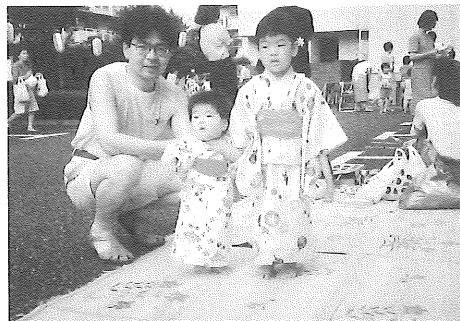
と声をかけていただいたり、同じくらいの年ごろの

子どもをもつお母さんと初めてお話をしたりして、顔見知りが増え、翌日からあいさつを交わし立ち話をする相手がぐんと増えたものでした。

次女のオムツ替

えや離乳食、長女の幼稚園通いなど、一日中二人の世話に追われているだけに、小学生が走り回り、やすやすとゲームやスイカ割りをする姿を目にし、今、こんなに手がかるわが娘たちも、数年後はかくも成長するものかと楽しみに思えたものでした。

このころ、娘たちの体の成長は著しく、浴衣の丈直しも毎年のことでした。梅雨のため、家にこもる



日が続く、気分転換にちようど良いと去年の浴衣を出したものでした。最初のうちは物珍しさも味方して袖を通してじつと立って来ていた娘たちも、私を手間取ると、すぐに飽きて動いてしまい、特に一〜二歳の次女はじつとしていられませんでした。

彼女が嫌がって座り込んでしまうと（やれやれ、こうなるとお手上げです）、さつきまでぐずっていた長女が急に「Kちゃん、ほらほら」と次女の機嫌をとって助けてくれたこともありました。丈を決めるだけの作業に蒸し暑さもあつて、毎年親子共ども汗だくでした。

次女三歳・長女小学一年生

次女が三歳となり幼稚園に入り、長女が小学校に入ってから、それまでの日常のこまごまとした世話から解放された一方、彼女たちがそれぞれの意思を年に数日の夏祭りに、はつきりと打ち出すように

なりました。「○○ちゃんと一緒に行きたい」「髪型はこうしたい」「浴衣をこの日は着たくない。あるいは、何が何でも着たい」などの要望を一応聞くだけは聞き、応じられない場合は話し合い、当日まで友達への送り迎え時間の調整などに、四苦八苦していたものでした。

子ども会でのお手伝い

一方で子ども会にも入り、ゲームで使うヨーヨー作りなど裏方のお手伝いをしました。二時間ほどで百五十個以上作ったでしょうか。娘たちも娘の友達も一緒に、コツをつかむまでは何度も失敗して、顔中水だらけになったことが今でも鮮やかに思い出されます。



また、打ち上げと称して親同士集い、互いの労をねぎらい、おしゃべりするのも楽しみの一つでした。親同士が顔見知りになり、「Mちゃんのお家はお母さんが平日夜七時まで働いている」、「Kちゃんのお家は上のお姉ちゃんが今年受験……」、と生活環境がわかると、親同士の連絡もずい分スムーズになりました。

自治会の役員として

自治会の役員になった年（任期は一年）は、ほかの住民の方と一緒に、数か月も前から何度も話し合いを重ね準備にいそしみました。

ささやかな規模であつても、主催する立場を経験することで、参加するだけでは見えなかつた苦労ややりがいもわかり、親しいご近所も増えていきました。また、ひとり暮らしや特別な事情を抱えている家庭があることは、自治会の活動を通してわかつて

きました。娘たちがひと夏越すたび、心身共に成長するように、私自身も子ども会や自治会の活動の中で、マンションという一つ同じ屋根の下でわが家とは異なるさまざまな生活が営まれていることを実感することができました。

公園でのお祭りでの出会い

八月のお盆明けは、わが家から歩いて数分の公園で商工会主催のお祭りが開かれます。公園の真ん中にやぐらが組まれ、その周りを地元の踊りの会の方々（年配の方が多い）が踊り、周囲には屋台が並び、焼きそばやかき氷などに行列ができます。

十年ほど前の夕方、娘たちを連れて涼んでいると、同じマンションに住むひとり暮らしのお年寄りに偶然お会いし、かき氷をごちそうになったこともありました。大変恐縮したのですが、その後、道でお会いするたびにいろいろなお話を聞かせていた



く間柄となりました。最近お会いしないな、と思っ
ていたら、二年前に体調を崩され、親戚の方が住ん
でいる遠くの地へ移られたそうです。

夜の公園でのひととき

このお祭りに出かける時は、あらかじめ家から枝
豆やおにぎりを持って行き、屋台で焼き鳥や焼きそ

ばなどを買ひ、夕
食を済ませること

もありました。会
場の隣はブランコ
やすべり台や砂場
などの遊具があ
り、おなががいっ
ぱいになった子ど
もたちは、雪洞ほんぼりの
灯りに照らされな

がら遊びます。薄明かりでのブランコは子どもか
ら目を離すととても危険なので、そこで出会った近
所の母親同士で、目は子どもの動きを追いながら、
帰省中の出来事や夏休みの宿題の出来具合につい
ておしゃべりしたものでした。そのうち、仕事帰りの
父親が合流し、お祭りが終わるまでのひとときを夜
の公園で過ごしたものです。

夏の終わり

この公園での祭りが終われば、夏休みも残すとこ
ろあとわずか。晴れた日には浴衣を洗います。やれ
やれ、今年も大人も子どもも元気に参加できて、よ
かった、よかったと安堵し、汗まみれでところどこ
ろ泥がついた浴衣をていねいに洗い、さおに干し、
夕方取り込もうと庭へ出ると、顔に当たるかすかな
風に秋の気配を感じたものでした。

(鎌倉女子大学非常勤講師)